

島根・円城寺前遺跡
えんじょうじまえ

- 1 所在地 島根県大田市三瓶町
- 2 調査期間 一九九二年(平4)四月～一九九三年六月
- 3 発掘機関 大田市教育委員会
- 4 調査担当者 遠藤浩巳
- 5 遺跡の種類 寺院跡
- 6 遺跡の年代 九世紀～一六世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(大田・三瓶)

円城寺前遺跡は大田市街地より東南方向、三瓶川に沿って約一〇km上流の三瓶川中流部に位置する。遺跡は三瓶川の北、丘陵性山地

の頂上に近い標高約二五〇mに位置する天台宗の古刹、円城寺の旧境内地と考えられる平坦地に立地する。

円城寺は平安時代の朱雀天皇の時代(九三〇～九四六)の朝満上人の開山で、かつては僧坊四八坊、寺領三千石を有し隆盛を極めた

と伝える。周囲には「良西坊」「寂光坊」などの僧坊の地名が残っている。発掘調査に先立ち、現在の境内地周辺の分布調査を実施した結果、僧坊の跡と考えられる平坦地が広範囲に存在することが確認された。発掘調査はダム事業の道路敷設に伴い実施し、調査面積は約六〇〇㎡である。

調査の結果、掘立柱建物の柱穴多数と礎石建物の礎石の一部、小鍛冶と思われる製鉄遺構、溝などの遺構を検出した。出土した遺物には土器・陶磁器・鉄製品・石製品・木製品がある。掘立柱建物は検出した柱穴の位置や数から何度かの建て替えがあり、建物の周囲に溝がめぐることが確認された。また火災の痕跡や、平坦地が斜面を造成しているため土砂崩れなどで一部崩壊し、その後整地されたことが明らかになった。

出土遺物のうち、土器については九世紀の須恵器・土師器が、陶磁器については一二～一五世紀の中国磁器や常滑焼・備前焼などの国産陶磁器がある。鉄製品は製鉄遺構の周辺から鉄滓とともに出土している釘類があり、石製品に砥石・硯などが、木製品は溝から出土した椀・曲物・建築材などがあり、この中に転読札が一点ある。これらの遺物の中で寺院跡に関わるものとしては、白磁皿に墨書のあるものや褐釉四耳壺、斎串などがある。

転読札が出土した溝は中世後期と推定されるもので、幅約二m深さ約六〇cmで、兩岸に杭が多数打ちこまれ、護岸工事が行なわれた

と考えられる。この溝内からは中世前期から後期にかけての陶磁器とともに、砥石・硯などが出土し、転読札はこの溝の上層から出土した。

遺跡の時期や性格については、平安時代から中世の円城寺に関連する僧坊などの建物跡で、鍛冶工房については、熱残留磁気測定と出土した鉄滓の分析から、中世前期の小鍛冶跡と考えられる。また九世紀の須恵器が出土したことで、円城寺の創建が一〇世紀前半とする寺伝より更に古くなるという興味深い結果が得られた。これらの調査結果から、広範囲に存在する平坦地はかつての僧坊跡と考えられ、今回検出したものと同様な遺跡が存在すると予想される。

8 木簡の积文・内容

(1) [奉カ] [般 経 護カ]
[] 転読大 [] 若 [] 守 [] [] [] []

272×49×7 011

(1)は大般若経の転読札である。守護[]とあることから、守護の下は「国家」あるいは人名が記載されていたのかもしれない。本来転読札はその性格から寺院側に残る場合は少ないが、何らかの事情で寺院側に残されたと考えられる。

中世後期の円城寺周辺の在地領主については、文献や近隣の神社の棟札に現われる佐波氏の存在が知られており、この転読札は佐波氏かその周辺の在地領主に関連する可能性がある。

(遠藤浩巳)

